



JCV バヌアツ共和国視察報告書

2019年8月31日～9月8日



認定 NPO 法人 世界の子どもにワクチンを 日本委員会



[催行概要]

目的 : ご寄付がワクチンとして子どもたちに届いている現状を支援者様に実際に見ていただき支援者様との関係を強化すること。支援国の国土、自然、生活、経済の状況をワクチン接種時事情の背景として情報蒐集し、理解すること。

期間 : 2019年8月31日(土)～9月8日(日)

視察国 : バヌアツ共和国

参加支援者 : 6名 NPO 法人 キャップの貯金箱推進ネットワーク 湯川 千春 様
株式会社 Good Service 山村 直秀 様
燦 福祉作業所 天成舎 小川 晴美 様、長島 修次 様
日本リユースシステム 株式会社 今野 優子 様
NPO 法人 Re ライフスタイル 永井 和美 様

J C V 職員 : 3名 奥寺 憲穂 (事務局長)
高橋 昌裕 (ドナーケアグループ)
清水 大輔 (広報・啓発・教育グループ)

現地協力 : 中村 まさえ (JICA 青年海外協力隊隊員 看護師)
バヌアツ保健省 予防接種拡大計画課 (EPI)

協力 : UNICEF バヌアツ事務所



空港で出迎えてくれる UNICEF スタッフ

【1日目：2019年8月31日（土）】

【2日目：2019年9月1日（日）】

日本出発・ポートビラ（エファテ島） バウアフィールド空港到着

午後8時、羽田空港に集合した一行は、剣持理事長の見送りを受け、午後10時発のカンタス航空にてオーストラリア・シドニーで乗継を経て、15時間余りの長旅の後、翌9月1日（日）、現地時間午後4時前に、バヌアツ共和国の首都、ポートビラのバウアフィールド空港に到着した。国内最大の国際空港だが、どこか一昔前の日本の地方空港を思わせるのどかな佇まい。冬の南半球とは言え、南太平洋に浮かぶ島国。日本のむせ返るような夏に比べ、一足早く清々しい秋を迎えたような陽気だ。空港には、UNICEF バヌアツ事務所のレオナルドさん、ローレンスさんが出迎えてくれた。お二人には、この後、最終日にバヌアツを離れるまで、全行程に帯同して現地の村々を案内いただき、今回の視察をサポートしていただくことになる。



UNICEF 事務所でのブリーフィングの様子

【3 日目：2019 年 9 月 2 日（月）】

ポートビラ市内／UNICEF バヌアツ事務所、JICA バヌアツ支所訪問

視察行程の開始。まずは、バヌアツでの子どもたちへのワクチン供与の窓口を担っていただいている UNICEF バヌアツ事務所を訪問。事務所代表のエリック・デュペアさん、健康担当のスーレンチメグ・ヴァンチンフーさんらスタッフの歓迎を受け、今回の視察に関してブリーフィングとレクチャーを受けた。「バヌアツは様々な支援を受けているが、2～3年の短期で終わってしまうものも多い。その点、JCV は必ず毎年、ほぼ同じ規模の支援をしてくださるため、計画が立てやすい。この国のワクチン接種プログラムにとっては本当に貴重なことで、感謝している」とエリック事務所代表。JCV の日本の支援者の皆さんの志は、しっかりと受け止めてくれていた。

独立行政法人 国際協力機構、JICA バヌアツ支所に武市直己支所長を訪ね、諸事情を聞いた――バヌアツは6州から成り、人口28万3,000人。毎年、2～6%ずつ人口は増加中。80%が地方部で、全国で病院は6、ヘルスセンター27、診療所75、簡易クリニックが210カ所ある。ワクチンの接種率は、2015年のサイクロンで一時期、急減したが、2016年段階で、BCG、DTPは約94%、MRIが77.4%。全国の保健施設における冷蔵庫などのコールドチェーンのカバー率も94%に達しているが、30%の施設で資格を持った看護師がおらず、人材不足が課題となっている。国内には医療大学がなく、看護学校が1校のみ。今年は、隣国のソロモン諸島から看護師70人を招く予定。国外に出入りする人も増えており、感染症のリスクは高まっている。今後は、新しいワクチンの導入、情報管理システムの充実、EPIスタッフの知識向上、ドローンによるワクチン搬送プロジェクトの推進などにより、アウトリーチ（出張接種）ができていない地域を重点的にカバーしつつ、ワクチン接種を促進する。



訪問した JICA オフィスで記念撮影



EPI に設置された JCV が支援した保冷库



ビラ中央病院で診察を受ける赤ちゃん



オーストラリアから派遣された救急医療スタッフ（女性）と研修中の現地スタッフ

EPI 中央保冷库

市内中心部にある保健省 EPI（予防接種拡大計画課）事務所。ここは、皆さまの支援で贈られたワクチンを、バヌアツ全土、60 に及ぶ住民が居住する島々のすべてに届けていく拠点基地。建物内には、厳重に二重の鍵で施錠された大型のウォークイン保冷库があり、国外から搬送されてきた各種のワクチンが、いったん、すべてこの中央保冷库に保管される。厳格に低温管理されたワクチンは、主要各島に設置された EPI からの要請に応じて出荷され、各地の村々にあるヘルスセンターや診療所に届けられる。ワクチン保冷库設備の整った施設であれば、まとまった量を車で届けられるが、地方部の村に対しては最終的に、携行運搬用のコールドボックスに入れて届けることもあるという。

ビラ中央病院

市内中心部からほど近い、バヌアツ最大の国立病院、ビラ中央病院を訪問。丘陵部のなだらかな斜面に、平屋建ての病棟がいくつも並ぶ。総合病院としてあらゆる診療科を備え、市民の傷病治療に対応している。特徴的だったのは、入院患者の看護、介護は、基本的に家族が行うこと。家族は夜も、ベッドの横の床に簡単な敷物を敷いて寝食を共にする。ここにも看護師不足の余波があるのかもしれない。「川崎市消防局」の文字が目に入った。見慣れた日本の救急車は、川崎市などのロータリークラブから寄贈されたものだった。ビラ中央病院には救急救命センターがあるが、そこには、複数の白人女性の姿が。彼女達からの指示を受けて動き回っていたバヌアツ人男性に聞けば、彼女らはオーストラリアから派遣されてきた救急救命の専門スタッフで、彼は研修を受けている最中。「彼女達からできる限りのノウハウを学ばなければならないのだ」と、忙しく動きつつも真剣な眼差しで語っていた。



ワクチンを接種しにきた母子



メレ村ヘルスセンターのジョセリンさん



ビラ イースト小学校の子どもたち

【4日目：2019年9月3日（火）】

ポートビラ近郊のメレ村ヘルスセンター

ポートビラの中心部から北西へ10 km足らずのメレ村。このヘルスセンターは、首都近郊の村だけあって、周辺の村々を合わせて7,000人をカバーする。「1歳未満の乳幼児175人全員の接種を目標に、週2回ヘルスセンターで接種を行い、毎週金曜には、接種に来られなかった子どもたちのためにアウトリーチに出向いているが、住民台帳もないため、不在のケースも多い」とワクチンを管理するジョセリンさん。ワクチン接種の促進にはまだまだ時間も手間もかかるようだ。この日も母親に連れられ、2人の子どもが接種に来ていた。日本で言う「母子手帳」のような記録簿を見せてもらったが、過去のワクチン接種の記録も正確に記述されていた。

ポートビラ中心部にあるビラ イースト小学校。幼稚園も併設されていて、通学する子どもの数は800人にも及ぶ。他に市内には、生徒数1,600人のマンモス学校もあるという。近年は子どもの出生数が増加傾向にあり、生徒数は年々、拡大の一途。受け入れ人数にも限界があり、最近では入学するのなかなか難しくなっているとのこと。雨が降ると途端に学校に出てくる生徒の数が減るという、なんとものかな一面もあるものの、小学校1年生の教室には「九九」の計算式が壁にずらりと貼られている。子どもたちに答えを隠して尋ねてみたところ、皆、しっかりと正確に回答してきた。ただ、掛け数が「12」までであり、「九九」ではなく、「九・十二」だったところが、私たち日本人には、なんとも不思議な感覚を覚えた。



母子保健センターでのワクチン接種の様子



現地料理のタロイモと鶏の照り焼き



ファナフォ村クリニックのスタッフ



故障した古い冷蔵庫

【5日目：2019年9月4日（水）】

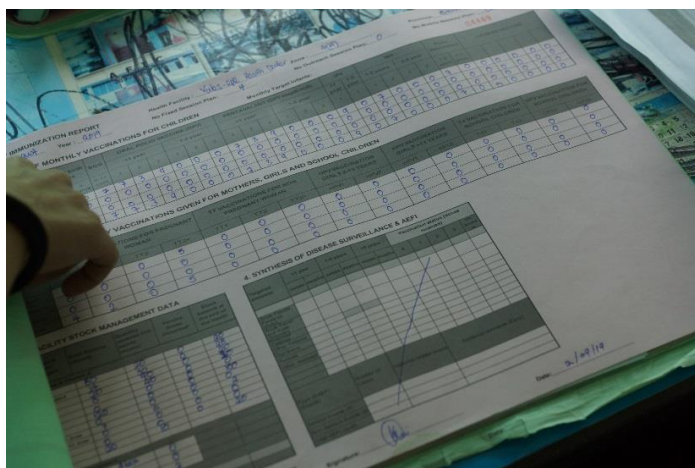
北部、バヌアツ最大の島、エスピリトゥサント島訪問

早朝、母子保健センターでワクチン接種の現場を見学したのち、午前11時、ポートビラ・バウアフィールド空港を双発のプロペラ機で発ち、およそ50分で北部、バヌアツ最大の島、エスピリトゥサント島のサントペコア空港に到着。一行は、南岸のサンマ州都、ルーガンビル（Luganville）のワクチン拠点、EPIで、同島での生活、医療環境につきブリーフィングの後、すぐ近くのユニティ・パークで昼食。タロイモやヤムイモに、魚の焼き物や鶏の照り焼きをバナナの葉の上に乘せた現地料理を露店で買い、近くの砂浜で手づかみで頬張るという、地元民の食事を体験した。

午後からは、ルーガンビルから北部へ車で45分ほど走り、ファナフォ村のクリニックを訪ねた。ここは、周辺の40～50の村をカバーし、1歳未満の乳幼児約200人を管轄している。スタッフは、今は2人体制だが、昨年は1名だったため、週に一度は周辺の村々にアウトリーチに出向いてはいるものの、2018年は対象幼児200人の内、50人に接種できなかったという。おまけに、電気は届いているが、半年程前からワクチン保冷庫が故障。コールドボックスと保冷剤でなんとか凌ぎ、ワクチンがなくなる度にルーガンビルまで悪路を車で飛ばして補充しに行くという毎日が続いている。EPIに保冷庫の修理を依頼しているが、肝心の修理技術者が不足して順番待ちなのだとか。幸い、私たちが訪ねた翌週、ようやく修理に来てくれることになった。スタッフは、「これで保冷庫も動くし、今は妻と2人体制になっているので、今年はワクチン接種率も高めていくことができる」と安心顔だった。



簡易クリニックの看板



ワクチン接種の情報をしっかり管理



ワクチン接種の準備をするケレンさん

【6日目：2019年9月5日（木）】

エスピリトゥサント島、北西部の深い森の中の村を訪問

この日は、エスピリトゥサント島の南部と北部の2カ所の村を訪ねることにした。まずは、島の南岸に注ぐアドソン川近くの小さな村。ルーガンビルからはわずか30km余りではあるが、途中からは鬱蒼とした森をかき分けるような悪路を、ドライバーが巧みにでこぼこを避けながら1時間余りを掛けて到着。突然、開けた丘の一角に、ヘルスセンターの管轄下にある、「ディスペンサリー」と呼ばれるさらに小さな簡易クリニックが現れる。そこを預かるのは、ケレン・クアイさん（30歳）。昨年、2018年、看護師として赴任した。

10の大きな村と、その周辺に点在する小さな無数の村々を合わせて、3,000人余り（2018年）の人口をカバー。2019年1月時点で1歳未満の乳幼児は98人だったが、「毎月、出産があって乳幼児の数は増えており、現時点の数は不明」とのこと。ケレンさんの下、現在は3人体制。電波が届かずスマホも使えない地域がほとんどのため、出産の事実も“うわさ”で伝わってくるのだという。ワクチン接種にとどまらず、出産から一般的な病気まで全てに対処。毎週木曜に「母と子どものプログラム」を実施して、ワクチン接種の重要性を訴え、毎週のようにアウトリーチで周辺の村を訪ねて歩く。

保健関係の仕事に就いていた両親の姿を見て育ち、27歳の時に看護師の資格を取得したケレンさん。森の中の山道を片道5時間歩いていくことも度々だとか。それでも、少しでも多くの子どもにワクチンを接種しようと、工夫と努力の毎日を重ねてくれている。



看護師のリッチーさん



ソーラー発電機



雨水を溜めるタンク



川の中を突き進む四輪駆動車

エスピリトゥサント島、北部ホッグハーバーの村を訪問

ルーガンビルにとって返し、午後は北進。今度は綺麗に舗装された道路を飛ばして1時間、およそ50 km 移動し、島の中央部、ホッグハーバーの診療所を訪ねた。海沿いの高台に位置する診療所は、山間の森林の診療所とは打って変わって明るい印象。カバーする村の人口は約2,000人。1歳未満の乳幼児は48人。それぞれの乳幼児が1歳になるまでに、2回はアウトリーチに出向いてワクチン接種を行っている。看護師のフランシスコ・リッチーさんによると、「以前は冷蔵庫がなく、度々、車で30分程のポートオルリィにワクチンを取りに行っていたが、2015年にソーラー保冷庫を設置してもらってからは、ここでワクチンを保管できるようになった」とのこと。また、「水の供給状態が悪く、ポンプを導入できれば解決できるのだが、タンクに貯めた雨水を使っている」。衛生状態を保つためにも、課題はまだ多い。ひとたび雨が降れば、でこぼこ道には大きな水溜りがあちこちに出現。EPI や UNICEF のスタッフはものともせず四輪駆動車で駆け抜ける。時には、ちょっとした川の水をかき分けて渡ることも。



勝又大使の話に熱心に耳を傾ける支援者の皆さん

【7日目：2019年9月6日（金）】

勝又晴美 在バヌアツ日本大使と面会

バヌアツに日本大使館が開設されたのは、昨年、2018年暮れのこと。駐バヌアツ大使として赴任された勝又晴美さんに面会の機会をいただき、バヌアツの国情、日本との関係、そして、医療体制の実情等についてお話を伺った。

周辺の南太平洋は、日本とも漁業では繋がりのある地域だが、過去、バヌアツは日本ではあまり注目されていなかった。近年は、国としての関係強化を進めており、バヌアツの関係省庁からも、3年に1回、担当官を日本に呼んで協議を続けてきた。

現状、基本的インフラが整っていない。道路も整備されていない箇所が多く、重病人の搬送に支障が出るケースもある。保健・医療関係では、まだまだ病院の整備が必要で、各国の支援も求められるところだが、特に地方部では看護師の不足が顕著で、育成の支援が必要とされている。また、地方部では適切な医療を施すのも困難な地域も多く、巡回するための移動車を用意して、医師に出向いてもらうような方法も、行政サービスとして保健省と協議しているところ。

小学校に保健室を作って、保健教育をしつつ、災害時には保健室を対策拠点にするようなことも検討している。理想はあるが、過度な負担を避けて、恒常的に成立できる方法を模索しているところ。

ただ、病院などの施設を作っても、医師、看護師が不足していることが大きな課題。隣国のフィジーなどから招聘したりしてはいるが、呼んだら呼んだで、住居費をはじめコストが掛かり、負担が増える。恒常的に続けていけるような対策を講じるよう指導している。



ソーラー発電機器を確認する JICA ボランティア



整備されていない道路は雨が降れば水溜り



一般的な住居コミュニティ

教育省では、新たに総合大学を設置することも検討中だが、施設の設置を含め、教育体制を確立するにはコストが掛かる。自前で学校を作るのがいいのか、フィジーやオーストラリアへ留学させて人材を育成するのがいいのか、議論しているところ。

もう一つ、海国ならではの困難もある。（ワクチン保管のための保冷库なども含めて）機械、機器類のメンテナンスだ。国内に技術の専門家がおらず、国外から呼ぶために、時間とコストが掛かる。ソーラー発電機や蓄電池なども、毎年、サイクロンが発生するため、傷みやすい。普通、メンテナンスは自助努力が基本だが、人材育成もおぼつかず、海に隔てられているため、そうもいかない。パーツの供給を含めて、メンテナンスの専門家をオーストラリアから招聘する支援方法も探っているところ。

感染症以外の病気としては、「糖尿病」問題が深刻化している。米の上に肉や魚を乗せて食べるスタイルが、手軽で早く食べられることもあって、バヌアツの基本的な食事だが、これにより糖尿病になり、失明、手足切断に迫られる国民も増加している。生活習慣病のため、保健衛生の取り組みだけでは対処できず、食事の指導、教育、啓蒙活動を促進することで、生活そのものの見直しを進めていかねばならない。



今野優子さん

UNICEF バヌアツ事務所で視察のデブリーフィング

今回のバヌアツ訪問プログラムも、すべての現地視察の日程を終了。関係施設、地方部の各地の診療施設への訪問、視察の活動をサポートしてくれた UNICEF バヌアツ事務所にて、全行程を振り返ってのデブリーフィングに臨んだ。以下、視察に参加された支援者の皆さんのコメント（発言順）

今野 優子さん

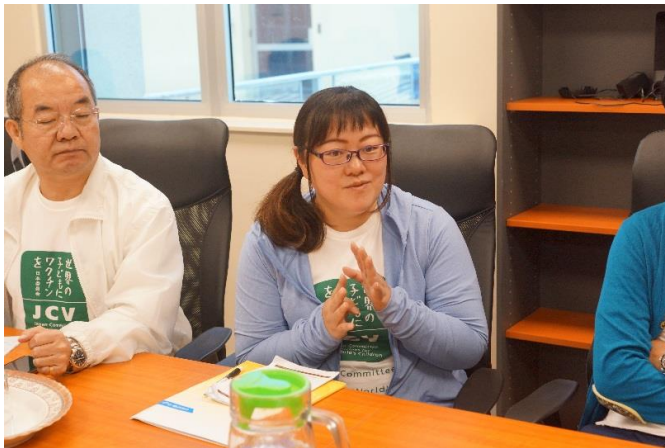
視察をサポートしてくださった UNICEF の皆さん、保健省 EPI のみなさんに感謝します。エスピリトゥサント島の視察が印象的でした。二つの診療所で、人手不足が悩みで思うような活動が困難であったり、歩いて5時間も6時間もかけてアウトリーチに出掛けるなど、実態がとてもリアルに感じられました。

山村 直秀さん

ワクチンのことは勿論ですが、それらを含めた生活環境の中で、電気、水道、ネット環境等あらゆる点で課題があり、一つの問題では解決しないのだということがよく理解できました。だからこそ、自分のできることを確実にやらなければならない、自分の使命が何かを考えねばならないと思いました。

湯川 千春さん

今回の支援国訪問が3カ国目でした。当初は、過去のブータンやラオスに比べ、接種の現場で人の集まりが少ないなという印象でしたが、バヌアツはそれだけ、人が簡単に集まれるような状況にないのだと気付きました。逆に今回は、接種に来た母親とも直接、話すことができましたし、実際に目で見て、これまで以上にワクチンの必要性をリアルに実感することができました。



小川晴美さんと湯川千春さん



山村直秀さん



永井和美さん



昼食会の様子

小川晴美さん

ここに住まう人々が誠実なことが、一番の印象でした。医療スタッフは限られた環境、資源の中で一生懸命に活動されている。人手不足の現実、国の置かれた状況を見て、教育には、20年、30年の長期的な視点に立った上での支援が必要なのだと痛感しました。

永井 和美さん

アウトリーチで村に行った時に、（出産があったことなどの）連絡方法が“うわさ”だと聞きました。やむを得ぬ状況とは言え、だからこそなのでしょう、国民の絆、家族意識が強いと感じました。ワクチンを取り巻く現実の姿を実感することができて、とても有意義な体験となりました。

UNICEF バヌアツ事務所主催の昼食会

2019年度、バヌアツ視察プログラムの締めくくりとして、UNICEF バヌアツ事務所による昼食会に招かれました。ポートビラ近郊のラグーン（礁湖）に面したリゾートホテルで、連日、視察のお世話になったUNICEF、保健省 EPI の現地スタッフの他、事務所代表のエリックさん、健康担当のスーレンさんらと、1週間の現地視察の成果と思い出話に花を咲かせました。また、勝又晴美日本大使も駆けつけてくださり、支援者の皆さんと一緒に、次回のバヌアツ視察の訪問での再会を期しました。席上、今回の視察団一行、そして、JCV 及び支援者の皆さまを代表して、JCV 事務局長の奥寺から謝辞を述べました。



【8日目：2019年9月7日（土）】

【9日目：2019年9月8日（日）】

バヌアツ・ポートビラ発、シドニー経由で帰国

すべての行程を終えた一行は、9月7日（土）午後、ポートビラのバウアフィールド空港を発ち、シドニーでトランジットの後、9月8日（日）午前6時前、無事、東京の羽田空港に帰国しました。滞在中は現地スタッフの献身的なサポートのおかげで、大きなストレスを感じることもなく、食事や水により大きく体調を崩すこともなく、バヌアツの実情を様々な角度から体験、実感され、皆さん、無事に視察を終えられたことが、何よりの成果でした。

[JCV のバヌアツ支援]

南太平洋に浮かぶ 83 の島から成るバヌアツは、リゾート地として知られていますが、人口の 77% は貧困状態にあります。細菌性髄膜炎（Hib）の発症が太平洋諸国で最も多いバヌアツでは、Hib ワクチン接種の導入が急務でしたが、一部の富裕層の所得が高いために GNI（国民総所得）を基準にする国際支援は受けられませんでした。そこで JCV が要請を受け、支援を開始しました。Hib ワクチン導入にあたり、これまで別々に定期接種していた DPT（ジフテリア、百日咳、破傷風）と B 型肝炎に、Hib を加えた 5 種類のワクチンを同時に接種できる五価ワクチンを採用。これにより、交通が不便な同国でのワクチン接種の負担が軽減されました。五価ワクチンは、1 パッケージに 10 人以上が入っている従来ワクチンとは異なり、1 人分のワクチンが個包装されているため、より容量の大きい保冷庫が必要です。JCV は、保冷庫も支援し、こうしたコールドチェーン拡充ニーズにも対応しています。

[バヌアツの基礎情報]

面積：

約 1 万 2,190 平方キロメートル（新潟県とほぼ同じ）

人口：

約 29.3 万人（2018 年、世界銀行）

首都：

ポートビラ

民族：

メラネシアン系（93%）、その他中国系、ベトナム系及び英仏人が居住

言語：

ビスラマ語、英語、仏語（いずれも公用語）

宗教：

主にキリスト教

歴史：

バヌアツ共和国は、オーストラリアのケアンズの東約 1,800km に位置し、83 の島々が南北約 1,200km にわたって広がる島嶼国家です。その歴史は数千年前にオーストロネシア語族の人々が渡来してきて定住し始めたのが始まりと言われています。ヨーロッパ人による植民が始まったのは、ジェームズ・クックによる調査が行われた 18 世紀末以降のこと。1906 年、イギリスとフランスの共同統治領となった後、数々の紛争を経て 1980 年 7 月、バヌアツ共和国として独立を果たした。2006 年 7 月には環境 NGO「地球の友」とシンクタンク「新経済財団」により「地球上で最も幸せな国」に選ばれた。

文化：

バヌアツ共和国 83 の島々は 6 つの州に区分されている。最大の島はエスピリトゥサント島で、同島のタブウェマサナ山（1,878m）がバヌアツの最高地点となっている。エファテ島にある首都ポートビラがバヌアツ最大の町。バヌアツの島の約半分は火山島で、険しい山の周りに平地が僅かしかない。特にアンブリム島、タンナ島、ロベヴィ島の火山は活火山として活動が継続している。残りはサンゴ礁から成る島。

